

二〇二〇年度 大妻中野中学校 第二回海外帰国生入試

一月十一日 問題用紙

国語

座 席 番 号
番

受 験 番 号
番
氏 名

受験上の注意

- (一) この問題用紙は表紙を含めて十ページあります。
- (二) 試験開始後ただちにページ数を確認して下さい。
- (三) 問題用紙、解答用紙それぞれに座席番号と受験番号と氏名を記入してください。座席番号と受験番号は算用数字で記入してください。
- (四) 試験時間は五十分です。
- (五) 解答はすべて解答用紙に記入してください。
- (六) この試験は百点満点です。

【一】 次の文章をよく読んで、あとの問いに答えなさい。（字数は記号・句読点も一字と数えます。）

主食と副食

ヨーロッパの人びと、とくにイギリス人は、どんな食事をしているのでしょうか。たいていの人は、「ヨーロッパ人の主食はパンです」とか、「パンと牛肉が主食です」などと答えるようです。

しかし、このような答えは、まちがいの**い**うべきでしょう。そもそも、「主食」と「副食」というような考え方が、ヨーロッパにはないからです。だいたい英語にも、フランス語にも、「おかず」などという言葉はありません。ご飯が「主食」で、「ご飯を食べる」ことこそが、食事をするのだという日本人の感覚は、ヨーロッパでは通用しません。「ご飯」という言葉が、「食事」の意味にも、「煮込んだ米」の意味にもとれるということが、日本の食生活の特殊性を示しています。反対に、ヨーロッパ人なら、日本人が「おかず」と思うようなものばかりをいろいろ食べても、それで「食事」になっているのです。

むろん、パンも食べますが、それもいろいろな食べ物のなかのひとつというべきでしょう。アメリカから「コロンブスの交換」でヨーロッパにもたらされたジャガイモであっても、同じような道を通ってきたトウモロコシであってもかまわないし、場合によっては、それがバナナであっても、またはステーキのような畜産物であっても、①「食事」は成り立ったのです。「主食」と「おかず」の区別のある国は、世界中でもむしろ少ないのかもしれません。反対にヨーロッパ人の場合は、ヨーロッパの農業が、多くの場合、穀物栽培と牧畜の混合になっていましたので、「雑食」性になってしまったのでしょうか。

そのように考えると、砂糖も食品として、たいへん大きな意味をもったことになります。紅茶や砂糖の話題は、イギリス人の生活ぶりからすると、穀物の話題と同じくらい重要なことなのです。じつさい、いまでもイギリス人は、平均してカロリーの一五パーセントから二〇パーセントを砂糖からとっている、とさえいわれているのです。イギリス人は、食事の最後に砂糖をたっぷり使った「スウィート（甘いもの）」というお菓子類を食べるのがふつうですし、紅茶にも砂糖をたっぷり入れて飲む人が、多いからです。

砂糖は、どうでもよい嗜好品しこうひんではなく、有力なカロリー源となっているうえ、紅茶と組み合わせられて、「イギリス風朝食」の基本となり、産業革命時代のイギリス人の生活の基盤になったのです。

夏目漱石とジョンソン博士を閉口させたポリッジ

しかし、それにしても、その後も朝食がどんなに変化しやすいものであったかについて、おもしろいエピソードが残っています。登場人物は、東京大学の英文学の教授であり、『我輩は猫である』などを書いた明治時代の文豪でもあった夏目漱石^{なつめ そうせき}と、すでに何度か登場した、イギリスの文学者ジョンソン博士です。

一九世紀も後半になってロンドンに滞在した夏目漱石は、悪名高いイギリスの食事に音^{おと}をあげ、ジョンソン博士を引き合いに出して、皮肉たっぷりの手紙を日本に送っているのです。助手に雇ったスコットランド人をからかうことを、楽しみのひとつにしていたジョンソン博士は、彼の編集した有名な英語辞書のなかに、「オート麦」という項目を設けました。「オート麦」というのは、麦類のなかでも下級なものですが、イギリス人の朝食によく出てくる「ポリッジ」とよばれる、一種のお粥^{かゆ}のような食べ物^{食べ物}の材料です。「ポリッジ」は、当時のことはよくわかりませんが、いまでは砂糖を入れて、ミルクで溶きながら食べるのがふつうです。それでもお世辞にも、おいしいものではありません。

ところで、ジョンソン博士は、スコットランド人をからかって、その辞書に「オート麦とは、イギリスでは馬に与えているが、スコットランドでは人が食べている穀物」と書きこんだのです。しかし、およそ一〇〇年後に、ロンドンに留学した夏目漱石が出くわしたのは、毎朝食卓に出てくる「ポリッジ」でした。つまり、この一〇〇年ほどのあいだに、スコットランドどころか、イギリス南部のロンドンでさえ、「ポリッジ」がふつうの朝食になっていたわけです。そこで漱石はすかさず、「さては、イギリス人がすべて A になったらしい」と、日本の友人に書き送って、うさばらしをしているのです。

ジョンソン博士が活躍した時代と、漱石がロンドンに留学した時代とのあいだには、一八世紀末から一九世紀はじめにかけて、「産業革命」といわれる大きな社会の変化が起きました。これまでの家のなかで行われていた手工業に代わって、工場がふえ、機械や蒸気機関のような動力が用いられるようになって、工業や鉱山業が急速に発展したのです。蒸気機関は、交通機関にも応用され、鉄道が全国を走るようになりました。それによって、ロンドンはもとより、リヴァプール、マンチェスター、バーミンガムなどという都市が大発展をとげました。こうして、イギリスでは、都市に住み、工場で働く労働者のほうが、農民の数よりも断然多くなっていったのです。

ほかでもないこの時期に、じつは「ポリッジ」のほか、「砂糖入り紅茶」を中心とする「イギリス風朝食」（イングリッシュ・ブレックファースト）が、生まれたのです。つまり、半世紀ほど前のジョンソン博士の時代には、ぜいたく品だとか、麻薬のような「毒」だとかいわれて、ウェスレイのようにその使用に反対する人が多く、大論争を巻き起こした「砂糖入り紅茶」が、この時代には、労働者のふつうの朝食となってしまったのです。

ところで、「イギリス風朝食」の特徴は、何よりもヨーロッパ大陸のもの、つまり、「コンティネンタル・ブレックファースト」にくらべて、「重い」ことです。現在の「イギリス風朝食」は、ベーコンや卵がつき、トーストもついていることが多いので、昼食より重い感じもします。このように「重い」朝食は昼間、からだを使って働く労働者には、適しているのだといわれています。

また、この時代には同時に、昼食と夕食のあいだが開き、それをうめるために、「アフタヌーン・ティー」や「デjeuner・ブレイク」の習慣も生ま

れました。午後四時ごろにひと休みして、ビسケットなどといっしよに紅茶を飲む習慣です。ですから、このころになるとイギリス人は、一日四食になったというべきなのかもしれません。

「聖月曜日」の撲滅と都市労働者の生活

それでは、このような変化は、どうして起こったのでしょうか。この理由を考えるには、都会の労働者たちの生活がどんなものであったかを、いろいろな角度からみなければなりません。

「産業革命」が進むにつれて、イギリス人の多くが都市に住むようになりました。一九世紀の終わりごろまでには、おそらくイギリス人の四人のうち三人までが、都会の住民となったでしょう。

農村では、共同の所有地であった山林などで、自由にたきぎをとり、家畜を飼うことができたが、「囲い込み」(エンクロージャー)といわれる運動が起こって、こうした共同で使える土地がなくなってしまったために、人びとは農業を捨て、都会に出たのだという意見があります。この意見には反論もありますので、どれくらい正しいかはよくわからないのですが、理由はともかく、たしかに都会の人口が圧倒的に多くなったことは事実です。しかも、そのために、イギリスの民衆の生活環境がすっかり変わってしまったことも、まちがいありません。

都会の労働者の住宅は、狭くて、汚く、トイレも水道もないのがふつうでした。しっかりと調理のできる台所ありませんでした。二軒が背中合わせになっていたために「バック・トゥ・バック・ハウス」とよばれた彼らの住宅の悲惨な状況については、マルクスの親友であったエンゲルスが『イギリスにおける労働者階級の状態』という書物に詳しい記録を残していて、よく知られています。

都会の労働者には無料で採取できる燃料もむろんありませんから、店で石炭を買ってこなければなりません。ということは、お金がなければ、暖をとることもむずかしいということです。短い時間で、きちんとした朝食を準備するなどということは、まったく不可能でした。ふつうは、暖炉の上に鍋をかけて調理をするようなたちだったのでしょうか。ですから、自宅でパンを焼くなどということは、なおさら考えられないことになりました。パンも店で買うはかなかったのです。

人びとの生活の場合、農村から都市に変わったことで、もうひとつ著しく変化したことがあります。それは、時間をどの程度正確に守らなければならないかということです。農村の生活は、季節によって農作業などの手順は決まていましたが、細かい時間の使い方は、むろん個人の自由にまかされていました。農民は、天気の良いときにしっかりと働き、雨が降れば休まざるをえないところもありました。日本でも「晴耕雨読^{せいこうどく}」という言葉があるのは、そのことを指しています。

同じように、伝統的な職人の世界も、「職人氣質^{かたぎ}」などと称して、個人の行動の自由がかなり認められていました。週末に飲んだくれ、二日酔いの月曜日はほとんど仕事をしないという、「聖月曜日^{セント・マデイ}」の慣習もひろく認められていました。はやり歌にも、こんな文句がありました。

月曜日は日曜の兄弟さ。

②火曜日も似たようなものさ。

水曜日には、教会でお祈りでもしなきゃ。

木曜は半休に決まっているし、

金曜日では、糸つむぎには遅すぎる。

土曜もむろん半休さ。

しかし、工場制度がひろがると、時間を厳格に守ることが要求されるようになりました。半分酔っ払って、遅刻ばかりしてくるような労働者がいるようでは、工場は経営できません。だから、「聖月曜日」に象徴されるような、時間にルースな生活は認められなくなりました。

そうなると、朝食は簡単に準備ができて、しかも、すぐに元気が出るようなものでなければならぬことになりました。「晴耕雨読」や「腹時計」のような、自分の自然な都合によるのではなく、機械時計の刻む時刻を正確に守って行動するということは、それに慣れていない人には、たいへんむずかしいことなのです。

私たち、いまの日本人にとっては、そんなことはたいしたことではないように思えますが、③日本人でも、江戸時代はそうではありませんでした。明治以降、長い期間をかけて、日本人全体がそうになってきたのです。それに、個人的にいえば、保育園や幼稚園のときから、大学を卒業するまで、「遅刻は罪悪」だと教育されてきた結果、日本の大半の大人は、機械時計の時刻にそって、正確に活動できるようになっているのです。

そのうえ、こんなこともありました。産業革命がすすんで、都市が人びとの生活の中心になると、労働者の家族はそのほとんどが、家庭の外に仕事をめつようになりました。母親も、子どもたちも、それぞれにどこかで雇われるようになったのです。この点でも、長い時間をかけて朝食の準備をする余裕は、なくなってしまったのです。

「イギリス風朝食」の成立

産業革命後のイギリスで、都市労働者の生活条件に見事に合ったのが、④紅茶と砂糖と、店で買うパンやポリッジの朝食でした。ポリッジも、お湯さえ沸かせればかんたんにつくれます。産業革命の時代、B、一九世紀はじめごろの労働者の民衆の生活ぶりについて、詳しい聞き書きを遺したヘンリ・メイヒューという人がいます。もとは、有名な小説家のディケンズと同じ新聞社に勤めていたこともある、新聞記者だった人です。このメイヒューによれば、ロンドンの街路には、ありとあらゆる種類の屋台の簡易飲食屋が、開業していたといっています。C、おかたの労働者は、

自宅で朝食をとっていたのですが、このような屋台がはやったということは、自宅で朝食をつくれな人も多かったことを示しているのでしょう。

それはともかく、「砂糖入り紅茶」をベースとする「イギリス風朝食」は、きちんとした台所がなくても、お湯さえ沸かせれば、なんとか用意す

ることができました。D、とくに紅茶と砂糖は、カフェインを多く含む即効性のカロリー源として、決定的な意味をもっていました。「聖月曜日」の慣習がシンボルとなっている、産業革命前のいい加減な労働時間の管理が、ビールに近いエールや、ウィスキーがもとになっているジンなどの飲酒の習慣とつながっていたのと、好対照になっているといえましょう。

即効性という意味では、朝食のみならず、仕事の合間の「ティー・ブレイク」も、同様の意味をもっていました。⑤朝から十分なカロリーを補給し、ばつちりと目の醒めた状態で働ける労働者、それこそは、工場経営者が絶対に必要としていたタイプの労働者だったのです。

こうしてカフェインを含む紅茶と高カロリーの砂糖、砂糖からつくられたジャムと糖蜜——伝統的に高級品のイメージのつよい蜂蜜のまねをした、もともと初期の典型的な「代用食」です——などはイギリス人の生活に欠くことのできない基礎食品となりました。イギリス人の労働者は、しばしば食事を「ホット・ディッシュ」、つまり「温かい食事」と「コールド・ディッシュ」に区分します。温かい食事は、温かいというだけでご馳走^{ちそう}なのです。冷たいパンを、一瞬にして「ホット・ディッシュ」に変えてしまう、一杯の「砂糖入り紅茶」がなければ、一九世紀イギリスの工業都市における労働者の生活は、成り立たなかったはずなのです。

もともと、紅茶そのものはカロリーがないうえ、価格も高いというので、はじめのうち、栄養学者などのあいだでは、きわめて評判が悪い食品でした。当時のデータでみると、一ペニーで買物をするとして、何カロリー分の食品が買えるかをみると、ジャガイモなら一〇〇〇カロリーも買えるし、ポリッジでも八八〇カロリーは買えるが、砂糖は価格が高いので二〇〇カロリー足らず、紅茶はむろんカロリーなしだということです。もつと安上がりで、栄養価の高いジャガイモとポリッジを中心にした、イギリス北部に多くみられる食事に対して、こうした食事は、主としてロンドンなど、南部の都市からひろがりはじめたといわれています。

E、このように高価なのにカロリー不足の食事には、ある種の身分の印、つまり「ステイタス・シンボル」的な意味がふくまれていましたから、批判はあっても、人びとはそれをあきらめたりはしませんでした。結局は、北部からひろがりはじめた「貧民の食品」(オート麦やジャガイモ)と、「高価な食品」(茶や砂糖)とがかさなりあって、近代イギリス庶民の「朝食」が成立することになるのは、ロンドンにおける夏目漱石の経験がよく示しています。

⑥一九世紀はじめの調査では、全国の一七軒の労働者の家庭で、一週間に一度も紅茶が出なかった例は一〇例しかなく、砂糖を使わなかったのは、一四例しかありません。小麦粉が食卓にのぼらなかった例は一六例ありますので、砂糖と紅茶は少なくとも小麦粉のパンと同じくらいには普及してしまっただけといえるのです。ちなみに、ジャガイモ不在のケースも一四例みられます。

注 *音をあげ…耐えられず

(川北稔『砂糖の世界史』岩波ジュニア新書より)

問一 ― 部①『食事』という言葉は、ここではどのような意味で使われていますか。最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で

答えなさい。

ア. 「主食」と「副食」を食べること

イ. 「ご飯」と「おかず」を食べること

ウ. 「食べ物」を食べること

エ. 「好きな食べ物」を食べること

問二 次のア～エは空欄Xに入る文です。正しい順序に直して記号で答えなさい。

ア. たとえば、ここで検討しようとしている朝食についても、もともとイギリス人は、中世くらい一日二食でしたから、朝食というものを食べていなかったといわれています。

イ. もっとも、いまでも日本では、正午から一時までが昼食の時間になりますが、イギリス人の昼食は午後一時から二時までのあいだです。

ウ. 一日三食の習慣ができ、食事の時間帯も、いまのようになったのは、一七世紀中ごろからのことだと思われます。

エ. まずなによりもはじめに知っておくべきことは、食事の習慣などというものも、歴史的には、私たちが想像するより、ずっと激しく変化するものだということです。

問三 Aには漢字一字が入ります。本文中より探して答えなさい。

問四 ― 部②「火曜日も似たようなものさ」とありますが、どういうことですか。本文中の言葉を使って四十字以内で説明しなさい。

問五 ― 部③「日本人でも、江戸時代はそうではありませんでした」とありますが、どういうことですか。この説明として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア. 機械時計の刻む時刻を正確に守って行動するのではなく、自分の自然な都合によって行動するということ。

イ. 機械時計の刻む時刻を正確に守って行動するだけではなく、自分の自然な都合によっても行動するということ。

ウ. 機械時計の刻む時刻が正確かどうか確かめるのではなく、自分の自然な都合が許されるものか考えるということ。

エ. 機械時計の刻む時刻が正確かどうか確かめるだけではなく、自分の自然な都合も許されるものか考えるということ。

問六

――部④「紅茶と砂糖と、店で買うパンやポリッジの朝食」とありますが、これについて説明した部分を本文中から二十七字で探し、初めと終わりの五文字をそのまま抜き出しなさい。

問七

B

E

に入る適切な言葉を次のア～エの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア. つまり

イ. むろん

ウ. しかも

エ. しかし

問八

――部⑤「朝から十分なカロリーを補給し、ぱっちり^スと目の醒めた状態で働ける労働者」とありますが、この労働者とは反対の労働者について述べている二十三字の部分を本文中から探し、初めと終わりの三文字をそのまま抜き出しなさい。

問九

――部⑥「十九世紀はじめの調査」とありますが、この調査を紹介することで筆者が読者に示そうとしたことを、本文中から三十三字で探し、初めと終わりの五文字をそのまま抜き出しなさい。

問十

次のア～エの各文について、本文の内容と合っているものには○を、合っていないものには×をそれぞれ答えなさい。

ア. いまでもイギリス人にとって砂糖は単なる嗜好品ではなく、有力なカロリー源といえる。

イ. イギリスで同時代に生きたジョンソン博士も夏目漱石も、「オート表」を朝食として好んで食べていた。

ウ. イギリスでは工場制度の広がりとともに、時間を厳格に守ることが要求されるようになった。

エ. 十九世紀はじめのイギリスでは、紅茶はカロリーがなく、価格が高くと栄養学者のあいだで評判が悪かった。

二 次の各問に答えなさい。

A 漢字に関する問題

問一 部の漢字の読みをひらがなで書きなさい。

- ①彼の説明に、みんな納得したようだった。
- ②皇后陛下が民衆にほほえみかける。
- ③各国の貧富の差が広がっている。
- ④ロンドンにいる友人を訪ねる。

問二 部のカタカナを漢字に直しなさい。

- ①ユウビン局を探す。
- ②物語はイガイな結末を迎えた。
- ③ウラニワに生えている薬草を摘む。
- ④朝食の時間をタンシユクする。

問三 次の①～③の語と反対の意味を持つ熟語を、
ただし、同じ漢字は二度以上使わないこと。
の中の漢字二字を組み合わせ作り、解答欄に書きなさい。

- ①安全 ②單純 ③自然

天 危 工 怖 陰 作 人 雑 混 災 複

B ことわざ・慣用句に関する問題

問四 次の各問いに答えなさい。

- ① 漢数字を一字以上含んだ四字熟語を一つ答えなさい。(例…一期一会)
- ② 動物の名前を含んだことわざ・慣用句を一つ答えなさい。(例…犬も歩けば棒にあたる)

C 文法・言葉づかいに関する問題

問五 次の①～③について、【例】を参考に、適切な数え方を答えなさい。

【例】鳥↓一羽

① 牛

② 靴

③ 椅子_{いす}

問六 次の①～④について、それぞれ指示に従って、文を書き直しなさい。

- ① 先生はいますか。私は田中といいます。 ※敬語に直しなさい
- ② 私は佐藤さんが鈴木さんがいないと みんなに伝えたのかと思った。 ※文の意味を変えずに、より分かりやすい文に直しなさい
- ③ 私は母と父を駅まで迎えにいった。 ※迎えられたのは父だけと分かるように直しなさい
- ④ これは多くの人に飲んでいる紅茶です。 ※文法的な間違いのない文に直しなさい

問題は以上です。